

## 【寄稿】

## 愛(め)でる辞書「クリック前時代」のおじさんから

見出し語を引くまでの時間の速さ、持ち運びの手軽さなどで「紙の辞書」を凌駕(りょうが)している「電子辞書」。紙から電子への乗り換えが多い教育現場で、「ちょっと、待って」と異議を唱える田邊祐司文学部教授に寄稿していただいた。

文学部教授・田邊祐司

もはや「紙の辞書」は英語学習者の標準装備ではないのだろうか。

中学校ではまだしも、高校の教室では電子辞書への乗り換え組が多いと聞く。事情は大学でも同様。例えば筆者のクラスでも薄くて、場所をとら

ない電子辞書が主役の座を奪いつつある。その電子辞書だが、学生が「引く」所作は圧倒的である。蓋を開けるやいなや、目的のこぼを求め、指がキーボード上を踊る。用が済むと、「パタッ」と蓋を閉じる。この間わずか数十秒。必要なものを、最小の時間とエネルギーで取得するのが彼らの流儀なのか、「クリック前時代」に青春期を過ごしたおじさんは、ただ呆気にとられるのみである。

何もここで電子辞書批判を展開しようというのではない。筆者自身、例えばこの稿はコンピューターで打っているし、コンピューターやネット上の辞書の助けを借りることも多い。電子辞書も手の届くところに置いている。指先ひとつで情報を得ることのできるクリック文化の恩恵に預かるひとりである。その必要・有用性は十分に認めながらもこと教育という観点からこうしたクリック世代の辞書引きをながめるとき、心のどこかにある違和感を述べたいのである。

## 「試行錯誤」で鍛える

クリック前時代のわれわれにとっての辞書は、紙のそれだった。「面倒」という思いを押し殺し、ページをめくる。アルファベットの索引には慣れが必要だったが、何度も引くうちに自然と指先と頭の間不思議な連携ができ、当てずっぽうでも引けるようになった。綴りも同様に、何となく頭に残っていった。

紙の辞書では見開きの2ページが同時に目に飛び込んでくる。ざっと提示されたものの中から所定の単語を検索するからだろうか、情報を選別し、その軽重を判断する一種の勤も養われた。ようやくお目当ての単語にたどり着くと「そうか!」「知っていたのに!」などと心の中でつぶやく。忘れないように単語をぐりぐりと赤鉛筆で囲んだりもした。気が向いたときには前後のことばをながめたり、関連語句なども引くようになった。付箋紙をブックマークよろしく使い、ページの余白には思いつきを書き込むことも覚えた。やがて、辞書は手あかで汚れ、ページはすり減り、最後はポロポロになった。使い込んだ辞書は自分の学びの軌跡であり、それは誇りだった。現行の電子辞書はこのような人間的な行為とはどうもなじまない。

英語学習にかかわらず、およそすべての学習には「?(疑問)→!(発見)」という「学びのプロセス」がある。特に、その中の「→」(試行錯誤)にこそ、クリックの世の中が失いつつあるものが存在しないだろうか。認知心理学では学習者に、彼らが今こなせるよりも少し高い処理の水準のものを与え、学習者自らがそれを体験し、思考し、発見することにより学習が進むという仮説がある。昔ながらの面倒くさく、手間もかかるプロセスの中で繰り返される「なぜ」、「よし、調べるか」、「へえ!」「そうか! わかった!」といった一連の「→」の中にこそ、学習を進め、ひいては人を鍛えるものがあるのではないだろうか。だからこそ、クリック世



▲マーカーや付箋がびっしり。田邊ゼミ生の「愛でる辞書」

代特有のお手軽な電子辞書引きには違和感があるのだ。

## 学びの「痕跡」を残す

この思いから筆者のゼミ(通訳コミュニケーション)では、学習の比較的早い段階から「紙の辞書をめ愛でる」ことを体得させるようにしている。「愛でる」とは辞書を床の間に飾ってながめて、悦に入ることでは無論ない。むしろ猛然と辞書を引いて、引いて、引きまくることで、自らの学びの痕跡を辞書に残すことなのである。さほど狂おしいほどの気持ちで、引き潰すような経験なしに言語はモノにはできまい。電子辞書を使用するのはむしろそういう経験をしてからの方が良いとさえ思うこともある。

その信念を、身をもって証明してくれているのは、ほかならぬわがゼミ生である。ここに載せた写真は、そんな彼らの学びの軌跡を伝える紙の辞書である。小ざれいな電子辞書からは伺い知ることができないようなパワーを感じとることができよう。TOEFL(R)、TOEIC(R)などの客観的な英語試験で高得点をマークし、英検1級などにも合格するわが自慢の息子、娘たちはこうした紙の辞書とのつきあい方を一旦は経験している。

クリック文化は情報収集に介在する七面倒なプロセスを確かに簡略化してくれる。デジタル革命が形成してきたこの文化は社会の進歩のための善意の効率化につながろう。だが、こと教育という現場においてそれが学習の効率化に直結するかというと、その評価にはまだ時代の検証が必要であろう。

英語学習プロセスのどこかの一時期でも良いから、濃密な紙の辞書引きの体験をさせてやりたい。それはアナログ文化に学んだわれわれのクリック世代への責務というと大げさだろうか。学生たちの華やかな指使いを見るたびに、「No pain No gain.」という先人の知恵が頭をよぎる。

.....

(たなべ・ゆうじ)

文学部教授。担当は通訳入門I、IIなど。

## 《New Ground -新しい見方&lt;10&gt;》

## 知的感性的遊戯空間「図書館生田分館」

小林 辰明(経済1・ジャーナリズム研究会)

専修大学には図書館が生田キャンパスに2つと神田キャンパスに3つ、合計で5つあり、全体の蔵書数は150万冊におよぶ。2004年に文部科学省が実施した「大学図書館実態調査」によると、私立大学の平均蔵書数が約30万冊、公立大学で約24万冊、国立大学でも約105万冊なので、専修大学の蔵書数はかなり多い方だと言える。

その5つの図書館の中で、生田キャンパスにある本館に次いで利用者が多いのが「生田分館」だ。

蔵書数は約5万冊で、本館の蔵書数約100万冊に比べるとかなり少なく感じるが、生田分館には本館にはない魅力がある。それは「自習スペースの使いやすさ」だ。地上5階建ての生田分館には各フロアに閲覧室が設けられている。蔵書数が本館の約二十分の一であるのに対し、床面積は約三分の一の広さなので閲覧スペースがかなり多くなっているのが分かる。実際、テスト前の閲覧室は、多くの学生が勉強している光景が見られる。資料の面では圧倒的に数で劣っているので、レポートの作成よりも小テストや試験対策としての勉強をしている学生が多いのも特徴だ。

もう一つ、本館とは違う特徴がある。生田分館は「21世紀の学生のための知的感性的遊戯空間」をコンセプトとして建てられたので、ほかの図書館に比べて娯楽色が強い。そのため、本館に比べ大衆小説の冊数が多い。村上春樹や村山由佳など人気作家の作品から先日劇場公開もされた横溝正史の「犬神家の一族」などの「金田一耕助」シリーズ、世界的大ヒットを記録している「ハリー・ポッター」シリーズなど大衆文学とも言える作品が多く所蔵されている。

春休みの開館時間は通常の授業期間とは異なるため、利用するにはあらかじめ開館時間を調べる必要があるだろう。長い春休みに読書を楽しみたい人には、ぜひ活用をお勧めする。

## 全学FD委員会

### 教員向け「授業のツールボックス」を発行

本学の教育力向上のためにさまざまな活動を行っている、専修大学全学FD委員会(委員長＝浅見和彦経済学部教授)では、教員が授業改善の方法や事例を相互に学び、普及していくための小冊子「授業のツールボックス(第一集)」＝写真＝を発行し、全専任教員に配布した。



この小冊子は、昨年の6月から8月にかけて、全専任教員を対象に行ったアンケート調査の回答をまとめたもので、講義、ゼミ、演習、語学、実技などさまざまな授業形態について、「授業のシラバス」「準備・内容」「学習の動機付け」「授業評価」「TA(ティーチング・アシスタント)、授業補助員の活用」などの項目ごとに、個々の教員が、日ごろの授業で工夫・改善している事例が多数収められている。

「メディア、機材の活用」の項目では、「パワーポイントで視覚的に理解出来るような資料の作成」「授業支援ブログの活用」などが、「学生の討論、参加、共同学習」の項目では、「質問票の活用」「コミュニケーション能力獲得のためのプログラム」などが紹介されている。

浅見委員長は「今後も改訂を続け、将来的には公刊出来る内容に充実させたい。教員同士が互いに刺激しあうきっかけとして活用していただきたい」と話している。

※FD(ファカルティディベロップメント)＝学生の学力向上のため、教員の授業内容や教育方法の改善などに組織的に取り組むこと。

《マンガ》

専大の生態(センダイ)

(漫画研究同好会・とりだんご 作)

